

551 腔原発悪性黒色腫の in vivo実験系の樹立

大阪府立成人病センター 婦人科
稲垣 実, 本郷二郎, 広田義和, 東 千尋,
小野雅昭, 水木次郎, 尾崎公巳

【目的】悪性黒色腫は進行が早く、転移しやすいため臨床的に極めて悪性度の高い腫瘍である。中でも女性性器に発生する悪性黒色腫は稀であるため十分な臨床的検討が行い難く有効な治療法が見つからない。そこで腫瘍の生物学的特性の解明と有効な治療法開発をめざし in vivo実験モデルを作成することを目的とした。【方法】56才の婦人に発生した腔原発悪性黒色腫を手術的に摘出し、MEM培養液中にて無菌的に細切し、2~3mm角の腫瘍塊をトロカール針を用いてSPF環境下にて飼育しているBALB/Cヌードマウス雄の背部皮下に移植した。以下同様の方法にて継代移植を行い、腫瘍の光顕、電顕観察、免疫組織学的検討、担癌マウスにおける腫瘍転移の有無を調べた。【成績】初代移植後70日目にヌードマウス背部皮下に黒色充実性の腫瘍塊形成を認め、移植後90日目に2代目へ継代した。継代移植率は初代は60%、2代目以降は100%となった。移植腫瘍の組織像は現在(4代目)に至るまで原腫瘍と同様で、楕円形ないし紡錘形の異型細胞が充実性に増殖している。移植腫瘍の光顕、電顕観察では細胞質中にメラニン顆粒が認められ、免疫組織学的検討(S100,ビメンチン等)で悪性黒色腫の特徴が確認された。現時点では担癌ヌードマウス各臓器への転移は見られず、癌悪液質の発現は見られていない。さらにSCIDマウスを用いて腫瘍の発育、転移について比較検討中である。【結論】極めて稀な腔原発悪性黒色腫のヌードマウス移植系を樹立した。移植腫瘍は原腫瘍の特徴を保持しており、女性性器悪性黒色腫の生物学的特性の解明と有効な治療法開発のモデルとして用いると考える。

552 超音波ドップラー法による子宮筋腫、腺筋症の血流変化の観察とそれを用いた両者の鑑別の試み

虎の門病院
為近慎司, 丸山正統, 東梅久子, 塩田恭子,
斉藤理恵, 小川恵吾, 高橋敬一, 宮川智幸,
伊豆田誠人, 児島孝久, 佐藤孝道

〔目的〕子宮筋腫と子宮腺筋症の鑑別は時に困難なことがあり、術中にはじめて診断が確定されることも少なくない。超音波ドップラー法による子宮動脈の血流の変化とカラーマッピング法が、これらの病態の鑑別に有用か否かを検討した。〔方法〕対象は当科に於て診断、手術を施行した筋腫、腺筋症症例のうち術前に超音波ドップラー法を施行された17例(筋腫12例, 腺筋症合併3例, 腺筋症2例)。対照群として超音波ドップラー法を施行し正常子宮を有し、年齢等をマッチさせた43症例を選択した。それぞれについて子宮動脈PI(Pulsatile Index), およびRI(Resistance Index)を測定した。さらにカラーマッピングにより結節周囲の血流陰影の有無により筋腫と腺筋症の鑑別を試みた。〔成績〕筋腫と腺筋症および両者の合併例との間にはPI, RIに有意の差はなかった。摘出子宮重量とPI, RIとの相関も認められなかった。筋腫・腺筋症を合わせた群を対照群と比較すると前者のPIは 1.57 ± 0.52 (Mean \pm SD), RIは 0.79 ± 0.11 , 後者のPIは 2.09 ± 0.57 , RIは 0.86 ± 0.09 であり、筋腫、腺筋症群に有意の減少がみられた($p < 0.01$)。対照群の測定時期を高温期、低温期に分けるとPIは前者で有意の増加を示した($p < 0.05$)がRIに差はなく、筋腫と腺筋症群ではPI, RIともに測定時期による差はなかった。結節周囲血流は筋腫核の85%に存在したが、結節を形成した腺筋症の66%にはみられなかった。〔結論〕①カラーマッピングによる筋腫と腺筋症の鑑別は補助的診断として有用である。②筋腫や腺筋症では血管床の拡張、抵抗の減少がみられるが子宮動脈のPI, RIによる両者の鑑別は不可能である。